

明星大学

日本文化学科紀要

第三十二号 令和六年三月

題目	筆者
版本単伝孝子伝のはじまり——元禄七年刊『土持兄弟おやかうかう物語』	勝又基

Department of Japanese and Comparative Culture

School of Humanities

no. 32 2024

Bulletin of Meisei University

ISSN 2186-2818

版本単伝孝子伝のはじまり

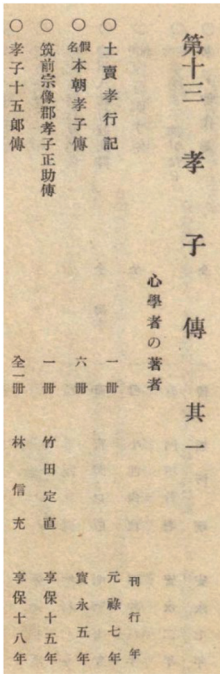
—元禄七年刊『土持兄弟おやかうかう物語』—

勝又基*

一 問題の所在

蔵書家として知られる杉浦三郎兵衛丘園が編んだ『雲泉莊山誌 卷之三（石門心学関係図書及資料）』（昭和七年（一九三二）、杉浦丘園刊）は、その蔵書の一覧である。その中に孝子伝の年表があつて、この面を研究する際には必読の資料である。

「孝子伝 其一 心学者の著者」と題したそれには、冒頭に次のごとく記されている。



いろいろと指摘したいことはあるが、本稿で問題としたいのはこの第一条、もっとも早い時期の刊行物としてあげられている元禄七年（二六九四）刊『土売孝行記』である。この書物は、国書データベース等で検索しても出てこない。書名の「土売」というのが地名を表すのか他の何かを表すのかもよく分からず、本当にこんな本が実在するのかと、やや疑わしく思っていた。

しかしこのたび、この一本が架蔵となった。その概要と位置づけについて紹介したいと思う。

二 架蔵本について

二― 書誌

〈巻冊〉袋とじ一巻一冊。

〈表紙〉後補。栗皮表紙。三方折込。二一・四cm×一六・五cm。

〈題簽〉なし。ただし左肩に剥離跡あり。

〈料紙〉楮紙。裏打あり。

〈丁数〉全三丁。

〈匡郭〉四周单边。二〇・二cm×一四・八cm。

〈内題〉「土持兄弟おやかうかう物語」

〈行数〉十五行。

〈柱題〉「かうくき 一（三）」。

〈挿絵〉一図。一丁裏～二丁表に見開き。

〈刊記〉三丁裏末尾に「^甲元禄七年八月吉日」。

先に挙げた『雲泉莊山誌』の記述と比べると、書名がやや異なる。た

だし「土売」という特徴的な語や冊数、刊年が意一致していることを考えれば、同一の書と考えて間違いないだろう。架蔵本は替表紙で題簽がないため、今後「土売孝行記」の題簽を持つ諸本が出現するかもしれない。

二二 本文

濁点、句読点、改行、カギカッコは私に付した。「々」以外の踊り字はしかるべき文字に変更した。※印は校勘箇所。

土持兄弟おやかうかう物語

神は正直のかうべにやどり、てんだうはまことの心をてらし給ふ。おやかうかうの心ざし、てんものふじゆましませば、ふしぎの事も有とかや。むかし、もうこし、本てうにも、その名をひろくのこしつ、二十四孝とゑらわれしも、名のみのこりて、今はなし。今かうかうのその人、おやもつ人のかがみぞと、ききおよびし、かきしるす。

ここに、大坂内本町上三丁目に、土持をかぎやうにして、ただかつかつの身なれども、おやかうかうの兄弟有。まづ、そよりよは他町にすみ、そのつぎの兄弟は、おひたるはと一所にすみ、ふだんかうかうつくせし也。

正月にもなりしかば、はは、子共に打むかい、「さてもうれしや。わがぜ立いづれもきやうだいそくさいにて、としをかさねる、めでたや」とよろこびたまへば、兄弟はあたりの子共をあつめつつ、ほう引きせて、なぐさめつ。

又有ときは、手を引て（二丁表）（挿絵）てら参つつ、やがつて※げかうのおりふし、ちやをよくせんじ、ちやぐはしやつけもの、よくこしらへ、ははをもてなし、夜にいれば、ふとんふすまをしきかさね、はんや、まくらに、よるのもの、をもきを、きやうだいかなしみて、紙子ふとんをこしらへつつ、かはりがはりに、ねずのとき、夜もあければ、あには山へ土とり、おとはてうずのゆをわかし、ははのきげんをうかがいける。あには山よりかへるさに、まいにち、もちをかいととのへ、「まづ御めしが出そなはり、御ひもふじに御座候はんに、これをまいれ」と、そのまに、さいの物、まいにちほかにととのへ、さて「御めしが出来候」と、てうせき、ちそう申けり。

あやかり物とおもひ子の、五日十日や、ないし半年は、かうかうつくす事あれど、かかるためしはありがたし。此人々は、おさなきときより、「かうかうふかく、つくしうみ、しゆみよりたかき、おやのをん」と心へて、かうかうひびにまさりける。

あるとき、はは、兄弟にのたまふは、「われ、かねがねのねがいには、西国三十三ばんめぐりたし」とありければ、「それ（二丁ウラ）こそやす御事※」と、兄弟たびのしやうぞくし、きんじよへもいとまごひにゆき、「此たび、はは西国めぐりたくと申されますゆへ、明日は参ます。としよられました人にて候へば、道にてもあひはてられましやうもしれませぬ。もしさやうのぎが候へば、その所にて三年が間とむらい候に付、ひさしくかへりませぬ事もござあるべし。今まではかたじけなし」とれいを申、もとゆひをきりはらい、ははをおひ、きしうなちの山よりふだ打そめて、それよりしだいしだいに、はは、「少ひろいたく※」ともされければ※、山坂山路に、あには手引てゆかるれば、おとはさきへまわり、このは、こま石かきのけ、かうかうつくせし事、なかなかふでには

つくしがたし。

ほどなくふだ打おさめけん、「無事にてげかういたしなば、御れい参いたすべし」と、ぐはんをかけ給ふゆへ、ははにいとまごひし、又西国へぞ参らる也。そのあとにて、はは、めもみへず、手あしなへ、むちうに成給ふ(三丁表)。

ときにおとと、かはちまで状をもたせ、その日に、ふじいでらにてゆきあへ、状をみるよりおどろきかへり、わらんづをはきながら、そのままははのそばへゆき、「ただいま西国よりかへりました」と、ゆひければ、むちうになりしはは、めをあき、手をあはせ、おがみ、「そなたをまぢました」と、おきあがらんといたされしが、八十二才を一こととして、ついにむなくもなり給ふ。きやうだいの人々は、なみだながらにゑかうして、あへなくのべにおくりけり。

さて、外町にすみ給ふ、あにおやと申、かうかうひびにつくせし事、ことばにはのべがたし。せつきぜつきに銀子あまりしだいに、あにのかたへもちゆき、内には一銭もおかず、おやのかはりと、あにおやにかうかうをつくしける。しかるに、てんのめぐみましまして、うへつかたへめしよせられ、あまた御ほうび下されて、今の世の二十四孝のかずなりと、きく人なみだながしけり。

甲 元禄七年八月吉日(三丁ウラ)

(以下、挿絵部分)

〈右上〉

七兵衛、ははにれいを申上る

御かげにてよき正月御ざります

ははよろこび

伝兵衛

平兵衛

〈左上〉

伝兵衛ははをむかいにきたる所

はやく御げかうなされました。御むかいにまいりました

平兵衛手引

はは、てらよりげかうし給ふ

〈右下〉

伝兵衛ははをおひ

平兵衛さきへまはり、みちをつくらう所

〈左下〉

平兵衛

伝兵衛

七兵衛

女ぼう

むりん

◆校勘記

そうりよ…惣領。

やす御事…「やすき御事」とあるべきところ。

やがつて…やがて。

ひろひたく…歩きたい。「拾ふ」は「歩く」の丁寧な言い方。

もされければ…申されければ。

三 考察

三―一 あらすじ

まず、あらすじをまとめておきたいが、その前に注意しなければなら
ないことがある。それは、本文には人名が全く出てこないということだ。
一方で挿絵には、多くの人名が出てくる。挿絵と本文とを突き合わせれ
ば、次のように引き当てが可能である。

惣領…七兵衛

兄(次男)…伝兵衛

弟(三男)…平兵衛

これをふまえて、人名を加えたあらすじを記しておく。

大坂本町上三丁目に、土持ちを家業とする貧しい親孝行の兄弟が
いた。土持ちとは「土木工事、建築などの際に、畚(もっこ)などで
土を運ぶこと。また、その人」(日本国語大辞典)。惣領の七兵衛は
他町に住み、その下の兄弟である伝兵衛と平兵衛は、老いた母と一
所に住み、孝行を尽くしていた。

正月になると、母は子供に向かい、「あなたたち兄弟が息災で年を
重ねてくれるのが嬉しい」と言って喜んだので、兄弟は近所の子供
を集め、宝引き(くじ引き)をさせて心をなぐさめた。

またある時は、手を引いて寺参りをし、帰りには、茶を煎じ、菓

子や漬物を作って母をもてなし、夜になると、布団や衾を敷重ねて
寝やすくしたが、夜半には夜着が重いだろうことを悲しんで、紙子
の布団を作って、代わる代わる寝ずの伽をした。夜が明けると兄の
伝兵衛は山へ土を取りに行き、弟の平兵衛は手水の湯を沸かして、
母の機嫌をうかがった。兄の伝兵衛は山から帰る時には、毎日餅を
買い整え、「ひもじいでしょうから、まずこれを食べてください」と
勧め、その間に副菜を毎日整えて、「ご飯ができました」と朝夕馳走
した。

「あやかり物」と思うような(立派な)子でも、五日や十日、半年く
らいは孝行を尽くすことがあるが、これほどの例はめったにない。
この人々は、幼いときから、「孝行は筑紫海のように深くありたい。
親の恩は須弥山より高い」と心得て、日々ますます孝行をしていた。

ある時、母が兄弟に、「私は西国三十三番を巡礼するのが前からの
願いだ」と言うので、「それはたやすい事です」と、兄弟で旅装束
をして、近所へ暇乞いして、「このたび、母が西国を巡りたいと申し
ていますので、明日参ります。年寄りなので旅の途中で相果てられ
るかもしれません。もしそのようなことがあれば、その所で三年の
間弔いますので、長い間帰らないこともあるでしょう。いままでも
世話になりました」と札を言い、髻を切り、母を背負って、紀州那
智の滝から札を打ち始め、それより順に回った。母が「少し歩きた
い」と言うと、山道を、兄の伝兵衛は手を引き、弟の平兵衛は先へ
回って、木の葉や石をかきのけて孝行を尽くしたさまは、なかなか
筆に表し尽くせない。

程なくして札を打ち収めたのだろうか、「無事帰ったら、お礼参
りをします」と願掛けをしていたので、(兄の伝兵衛は)母に暇乞い

して、また西国へ旅だった。その間に母は、目も見えず、手足が萎え、意識が朦朧となってしまった。

弟の平兵衛は河内へ手紙を送り、兄の伝兵衛はその日に藤井寺で手紙を受け取り、読むやいなや驚いて帰り、草鞋を履いたまま母の側へ行き、「ただいま西国から帰りました」と言うのと、朦朧としていた母は、目を開き、手を合わせて拝み、「あなたを待っていました」と起き上がろうとしたが、そのまま八十二歳で没した。兄弟は涙ながらに弔い、仕方なく野辺送りした。

さて、外町に住む親がわりの兄・七兵衛へ日々孝行を尽くしたさまも、言葉に述べがたいものだった。節季ごとに余った分の銀子を惣領の所へ持って行き、家には一銭も置かず、親の代わりと思って七兵衛に孝行を尽くした。すると、天の恵みがあり、お上から召し寄せられ、あまたのご褒美を下され、今の世の二十四孝に加えられるべきだと、聞く人は涙を流した。

三―二 挿絵について

挿絵は四図に分かれている。

右上…正月の風景。場所は母親・伝兵衛・平兵衛の家か。七兵衛、伝兵衛、平兵衛の兄弟が母に新年の慶びを伝える。

左上…母の寺参りを助ける。場所は山中。本文では「又有ときは、手を引てら参つ、やがつてげかうのおりふし、ちやをよくせんじ、ちやぐはしやつけもの、よくこしらへ、ははをもてなし」と、手引きしたことが記されている。挿絵では伝兵衛と平兵衛が母を出迎えている。

右下…母の西国三十三カ所巡りを助ける。本文の通り、兄の伝兵衛が

母を背負い、弟の平兵衛が先へ回って道を繕っている。

左下…表彰を受けた後の兄弟。場所は惣領・七兵衛の家だろう。部屋
の中央に、お上からの賞金と思われる青緋あおぞしが置かれている。本文にはない「女ぼう」「むりん」が描かれている。「むりん」は下女だろう。「昔の奏者、今のりん」の慣用句が有るとおり、「りん」は下女の通名である。「む」については未詳。

三―三 政治・思想・表現

この孝子伝の舞台は大坂である。本文中には「大坂内本町上三丁目」と地名に関する細かい記載がある。この地名は現在では、大阪市東区内本町一丁目・谷町三丁目にあたる（『日本歴史地名大系』）。場所が特定できた上で考えるべきは表彰者である。本文には「てんのめぐみましまして、うへつかたへめしよせられ、あまた御ほうび下されて」と記されているが、その「うへつかた」とは誰なのか。大坂は幕府の直轄地で東町奉行・西町奉行が置かれていたため、このどちらかだと考えるのが穏当だろう。地理・時代を考えると、東町奉行の松平忠周（元禄五年（一六九二）四月十四日～元禄十三年（一七〇〇）十月二十六日在任）が該当する。

思想的には顕著な傾向は見られない。冒頭の導入文に見える「神は正直のかうべにやどり、てんだうはまことの心をてらし給ふ。おやかうかうの心ざし、てんものふじゆましませば、ふしぎの事も有とかや」という文言も使い古されたもので、神・儒・仏いづれの影響、と考えるべき手がかかりにはならない。「むかし、もろこし、本てうにも、その名をひるくのかしつ、二十四孝とゑらわれしも」今の世の二十四孝のかずなり」などと『二十四孝』への言及があるけれども、これもすでに定着していたものである。

文章は平易な漢字平仮名交じり文である。この時点ですでに『二十四孝』の平仮名版も多く刊行されていたし、日本人を扱った孝子伝も、藤井懶齋『仮名本朝孝子伝』（貞享四年（一六八七）五月、京都西村孫右衛門刊）が出ていた。平仮名の孝子伝の土壤は十分に備わっていたということができるだろう。

三―四 他資料からの裏付け

この表彰を、他の資料で探してみよう。幕府編『官刻孝義録』（享和元年（一八〇一）刊）巻一「摂津国」の部の、目録冒頭に次のような記事がある。

摂津国

孝行者	大坂町奉行支配所 北新町二丁目	町人借屋住	七兵衛 歳不知	元禄七年 御褒美
孝行者	同支配所 同所	七兵衛妻 名不知	同時 御褒美	
孝行者	同支配所 内本町上三町	同弟町人借屋住 平兵衛 歳不知	同時 御褒美	
孝行者	同支配所 同所	同 伝兵衛 歳不知	同時 御褒美	

『孝義録』には、目録に名前が載るだけで本文が掲載されない孝子は何人もいる。彼らもその部類であり、右の記述が情報の全てである。まず、物領の七兵衛についての情報が新しい。七兵衛とその妻も褒美を受けた、ということが分かった。さらに、その住所が北新町二丁目（現・大阪市東区北新町一丁目）であったことも明らかになった。

三―五 孝子伝の歴史の中で

該書の価値を一言で示すならば、この論文のタイトル通り、「版本単伝孝子伝のはじまり」ということになる。

一人を取り上げた伝記を「単伝」、「二十四孝」のように複数の人物を取り上げた伝記集を「叢伝」と言う。

版本の孝子伝は、当時すでに少なからず刊行されていた。元政『釈氏二十四孝』（明暦元年（一六五五）一月序刊。京都山屋治右衛門）、高泉『釈門孝伝』寛文六年（一六六六）、京都田原氏経房」といった僧の手に成る孝子伝だけでなく、儒学者・藤井懶齋による『本朝孝子伝』（貞享二年（一六八五）十月、京都西村孫右衛門刊）も刊行されていた。

単伝の孝子伝も、写本では少なからず書かれていた。福知山藩主、島原藩主を歴任した松平忠房がその先駆者であり、領内の孝子についての漢文伝記執筆を、林家の儒学者にしばしばあつらえていた。徳川綱吉が表彰した駿河国五郎右衛門についても、林鳳岡「孝子今泉村五郎右衛門伝」（天和三年（一六八三）九月成。漢文）がある。これらについては拙著『親孝行の江戸文化』（平成二十九年（二〇一九）笠間書院刊）にまとめた。

ただしこの「版本」「単伝」という二つの要素を兼ね備えた書物は、これまで生まれていなかった。知る限り唯一の先行例は、前述の五郎右衛門について、天和二年に刷物が作成された、という記述と本文の写し（前掲著第一章第四節の四。七三ページ）。ただこれはおそらく、書物の形ではなく一枚刷だっただろう。この次に早い版本単伝の孝子伝は、享保十五年（一七三〇）刊『筑前宗像郡孝子正助伝』（柳枝軒）まで待たねばな

らない。該書がいかに異質な作品であったかが分かるだろう。そして安永、天明期ごろからは何十もの版本単伝孝子伝が各地で刊行される。その先駆をなすのがこの『土持兄弟おやかうかう物語』だと言いうことができる。

四 本文画像



